

電子情報通信学会論文誌の状況

Statistical Report for IEICE Transactions

編集理事 山中直明

電子情報通信学会では、A~D^(注1)の和文論文誌(JA~JD)、英文論文誌(EA~ED)、及びELEX(IEICE Electronics Express)、NOLTA(Nonlinear Theory and Its Applications, IEICE)、ComEX(IEICE Communications Express)の11誌体制で広く電子情報通信分野をカバーしている。今まで、論文誌の状況に関しては余り親しみがなかったかと思われるが、今回、広く会員に情報公開を行うこととした。

2012年度までの論文掲載件数を図1に示す。図のように会員の方のアクティビティに比例して大変に充実した論文誌となっている。和文論文誌は、主に国内のアカデミアを中心に丁寧な記述と査読による研究内容をしっかりまとめた論文が多く、大学院教育において一定の機能を満足している。特に研究会(技術報告)で広く討論をして、論文としてまとめるスタイルが定着しており、論文の一つの使命である「アチーブメント」として、研究成果のマイルストーンになっている。英文論文誌は、過去10年で大変大きく成長し、現在はアジアを中心に

多くの投稿を集める安定期になったと言える。図2に英文論文誌の国・地域別投稿数を示す。

先に述べたが、既に国内からの投稿をアジアを中心とする海外からの投稿が上回り、名実共に国際情報発信誌となっている。これに伴い本会の海外会員は、3,200名を超え、国際化を大きくけん引していることは疑う余地もない。多くの海外会員は、日本語の会誌を読まず、論文誌を中心に活動している。また、国内の会員にとっての特色としては、アジアから世界への情報発信として一定のファンクションがあり、今後は研究会のような活動をアジアに広めて、研究会をベースとして論文や国際会議を発信するスタイルが考えられる。

次に、今回編集委員会で著書や読者のメリットを考え、以下の統計情報を初めて公開する。表1は、各論文誌の採録率である。また、表2は、各論文誌の査読期間である。採録率は平均であり、戦略的な特集号によって値が異なっている。採録率は、若干低下傾向にあるものの、投稿者には感じて頂けていると思われるが、他学会

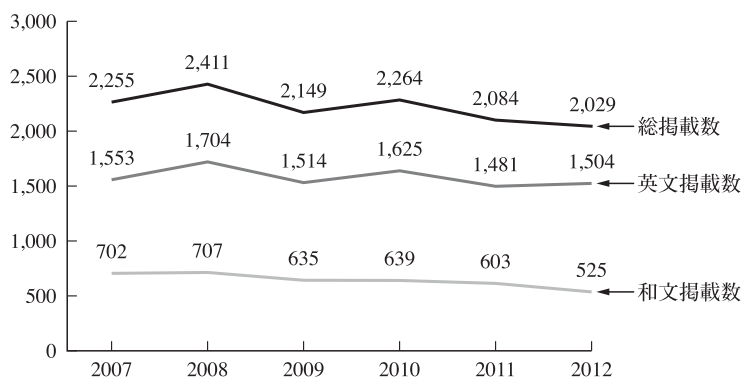


図1 2012年度までの掲載件数

(注1) A(基礎・境界), B(通信), C(エレクトロニクス), D(情報・システム).

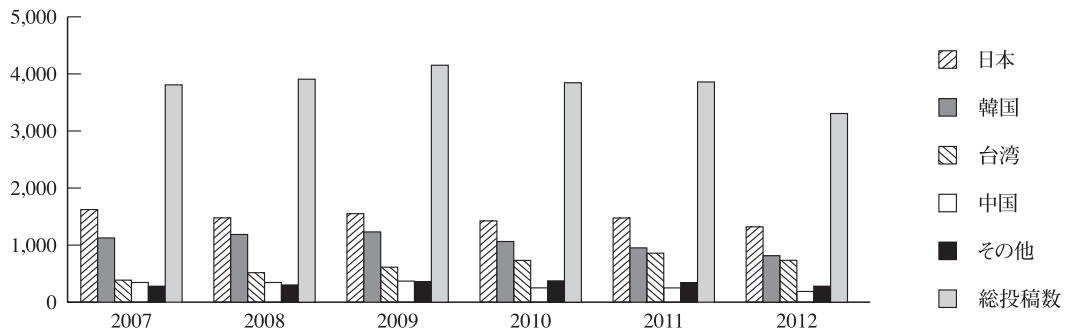


図2 英文論文誌の国・地域別投稿数

表1 各論文誌の採録率

| | | JA | JB | JC | JD | EA | EB | EC | ED | ELEX | NOLTA |
|--------|------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| paper | 2010 | 39.3% | 45.6% | 52.8% | 37.6% | 36.6% | 28.3% | 41.4% | 33.1% | — | 62.5% |
| | 2011 | 34.7% | 48.6% | 64.7% | 42.2% | 33.6% | 31.6% | 45.3% | 32.8% | — | 66.7% |
| letter | 2010 | 68.6% | 43.8% | 43.8% | 44.4% | 42.7% | 37.4% | 46.9% | 40.2% | 28.9% | — |
| | 2011 | 68.5% | 65.1% | 55.6% | 56.7% | 33.9% | 38.7% | 50.0% | 35.6% | 28.0% | — |

表2 査読期間の統計情報（日数）

| | | JA | JB | JC | JD | EA | EB | EC | ED | ELEX | NOLTA | |
|--------|------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|------|-------|-----|
| paper | 2010 | 1回目 | 73 | 69 | 45 | 77 | 109 | 131 | 94 | 109 | — | 97 |
| | | 2回目 | 137 | 132 | 105 | 154 | 211 | 237 | 166 | 194 | — | 155 |
| | 2011 | 1回目 | 68 | 63 | 45 | 75 | 108 | 122 | 78 | 119 | — | 77 |
| | | 2回目 | 115 | 121 | 106 | 145 | 177 | 220 | 147 | 202 | — | 125 |
| letter | 2010 | 1回目 | 46 | 34 | 20 | 42 | 72 | 97 | 60 | 85 | 41 | — |
| | | 2回目 | 48 | 76 | 69 | 98 | 118 | 173 | 124 | 130 | — | — |
| | 2011 | 1回目 | 87 | 37 | 35 | 47 | 73 | 90 | 62 | 86 | 35 | — |
| | | 2回目 | 82 | 91 | 76 | 96 | 119 | 168 | 124 | 153 | — | — |

にはない丁寧な査読で論文の速やかな採否決定に努めている。また、玉石が混じることを恐れず、オリジナリティの高い論文や、アイデアを採録することも戦略としている。今後に向けては、ポジションペーパー（大きな研究の流れを作ったり、未完成でも高いオリジナルアイデアのある論文）の企画等を行っており、本会独自の情報発信ができる可能性がある。なお、ComEXについては既に発刊されているが、まだ統計情報が取れていないことをお断りする。査読期間については、会員の貴重な研究成果を必要最低限の査読期間でタイムリーに出版するため、多くの編集委員、査読委員、事務局の協力を得て、期間の短縮に取り組んでいる。まだ不十分ではあるが、多くの論文誌で査読期間の短縮傾向が見られている。投稿数が増大する中で大変に大きな成果である。

最後に、本会では、諸氏の努力によって大変充実した

論文誌を発行しており、他学会の論文誌よりも早いと感じる会員も多いと思う。会員の皆様は一度、I-Scoverを使ってサーチして、自分の分野を再確認してもらいたい。編集委員会の最大の課題は、サイテーションの向上である。そのために、原点に戻っていい論文を集め、ホットなトピックスにアタックし、有効に活用されるような論文誌にしていきたいので、御協力をお願いしたい。また、自分の本会の論文を積極的に引用して活用することも必要かと思われる。

電子情報通信学会では、著者は、自らのブログ、大学等の研究室サーバ、企業のデポジット等に、ある一定の条件の下に論文を掲載できます。（http://www.ieice.org/jpn/about/kitei/files/chosaku_hyou3.pdf）

これは、著者の便宜を最大限に尊重する本会の新しい施策です。どうぞ御活用下さい。